論　文

産業クラスターにおける ビジネスインキュベータのソーシャル・キャピタルと知識創造

劉　　瑩*

要旨

本稿の目的は，ビジネスインキュベータ（Business Incubator（以下 BI と略す））が地域における外部の組織と構築するソーシャル・キャピタルと，インキュベーションマネジャーが入居企業と構築するソーシャル・キャピタルはいかに産業クラスターの形成・発展に寄与できるかに関する理論的な仮説モデルを提唱することである。

BI は，創業まもない企業に共有のオフィス，ビジネス支援サービスとネットワークを提供する施設である。また，BI は，多くの国や地域にベンチャー企業の育成を促進し，産業クラスターの形成・発展に寄与できると認識されている。そのため，1980 年代以降，BI に関する研究が活発になってきているが，それらの研究は実証研究が多い。さらに，BI が産業クラスターの形成・発展に寄与できると認識されているにもかかわらず，両者の関係の理論的なメカニズムはまだ明らかにされていない。他方で，BI のネットワーク構築に関する研究は多くなされている。しかし，それらの研究はネットワーク論における大変重要となるソーシャル・キャピタル論を詳細に考察するものが少ない。

そこで，本稿は，ソーシャル・キャピタル論と産業クラスター論に着目し，BI はソーシャル・キャピタルを通じて，いかに産業クラスターの形成・発展に寄与するかに関する仮説を提唱した。具体的に言うと，① BI は産業クラスターにおけるセカンド・レベル・インフルエンサーの役割を果たしている，② BI は外部の組織との構造的ソーシャル・キャピタルを通じて，地域の新しい知識の創造を支援する，③ BI は外部の組織との認知的ソーシャル・キャピタルを通じて，地域の新しい知識の創造を支援する，④ BI は外部の組織との関係的ソーシャル・キャピタルを通じて，地域の新しい知識の創造を支援する，⑤ BI は内部のソーシャル・キャピタルを通じてより多くのベンチャー企業を育成し，産業クラスターの形成・発展に寄与するという 5 つの仮説が確立された。

キーワード

ビジネスインキュベータ，ソーシャル・キャピタル論，産業クラスター論，知識創造

* 立命館大学大学院経営学研究科 博士課程後期課程

目　　次

はじめに
Ⅰ．BI の定義と BI のネットワーク構築に関する先行研究の考察
Ⅱ．ソーシャル・キャピタル論の発展系譜
Ⅲ．経営学におけるソーシャル・キャピタルに関する先行研究の考察
Ⅳ．ソーシャル・キャピタルの機能と知識創造
Ⅴ．産業クラスターにおけるソーシャル・キャピタルの役割
おわりに

は　じ　め　に

ビジネスインキュベータ（Business Incubator（以下 BI と略す））は，創業まもない企業に共有のオフィス，ビジネス支援サービスとネットワークを提供する施設であり（Bruneel et al., 2012），ベンチャー企業の育成を促進し，産業クラスターの形成・発展に寄与できると認識されている。

1980 年代以降，BI に関する研究が活発になってきており（Allen and Rahman, 1985; Allen and Bazan, 1990; Hackett and Dilts, 2004），実証研究が多く行われている。ところが，BI が産業クラスターの形成・発展に寄与できると認識されているにもかかわらず，BI と産業クラスターの両者の関係の理論的なメカニズムはまだ明らかにされていない。他方で，BI のネットワーク構築に関する研究は多くなされているが（Bollingtoft and Ulhoi, 2005; 稲垣・高橋，2011; Sa and Lee, 2012; 丹生，2016），これらの研究はネットワーク論において，非常に重要となるソーシャル・キャピタル論を詳細に考察するものが少ない。

そこで，本研究は，ソーシャル・キャピタル論と産業クラスター論に着目し，BI が地域における外部の組織と構築するソーシャル・キャピタルやインキュベーションマネジャー（Incubation Manager（以下 IM と略す））が入居企業と構築するソーシャル・キャピタルはいかに産業クラスターの形成・発展に寄与できるかに関する理論的な仮説モデルを提唱する。

本稿の構成は次のとおりである。第 1 節では，BI の定義及び BI のネットワーク構築に関する先行研究を考察する。第 2 節では，近年，注目されているソーシャル・キャピタル論の発展系譜を概観した上で，本研究におけるソーシャル・キャピタルの位置づけを明らかにする。第 3 節では，経営学の分野におけるソーシャル・キャピタル論を考察する。第 4 節では，ソーシャル・キャピタルの機能と知識創造に関する先行研究を考察する。第 5 節には，産業クラスターにおけるソーシャル・キャピタルの役割を論じる。最後に，ソーシャル・キャピタルはいかに知識創造を通じて産業クラスターの形成・発展を促進するかに関する理論的な仮説モデルを提唱する。

Ⅰ．BI の定義と BI のネットワーク構築に関する先行研究の考察

1．BI の定義

BI の起源は，1959 年にアメリカニューヨーク州北西部のバタビアに設立されたマンキューソ・ビジネスインキュベーターである（星野 2006）。1980 年代初頭から，BI が地域におけるベンチャー企業の育成と雇用の創出の有効な手法として注目されるようになったため，BI の設立が多くの国々で活発になっている。例えば，2013 年，日本には公的機関（国，地方自治体，第三セクター，商工会議所等）によって整備された BI が約 500 ヶ所存在ある（経済産業省，2013）。また，2012 年，アメリカとカナダには 1,100 所の BI が存在する（Zehner, et al., 2014）。さらに，2014 年末で，中国には 1,576 ヶ所の BI が存在する（中国産業調研ウェブサイト［2016］）。しかし，世界の国々で BI がこれほど普及してきているにもかかわらず，BI の定義はまだ曖昧である。本節では，BI の定義に関する先行研究を考察した上で，本研究における BI の定義を述べる。

BI は，様々な研究者（Allen and Rahman, 1985; Allen and Bazan, 1990; Hackett and Dilts, 2004; Bruneel et al., 2012），NBIA[1)]（2015）と公的機関（経済産業省，2013）によって定義されており，代表的な先行研究の特徴を以下に述べる。また，表 1 は，BI の定義に関する代表的な先行研究をまとめているものである。Allen and Rahman（1985）は，主に部屋の賃貸と共有のオ

表 1　BI の定義に関する先行研究

著者	定義	強調点
Allen and Rahman（1985）	BI とは，部屋の賃貸，共有のオフィスサービスとビジネスコンサルティング支援の提供を通じて，企業の初期成長を支援する施設である。	ハード面の支援
Allen and Bazan（1990）	BI とは，起業するためのスキル，知識とモチベーション，共有のオフィスやサービスを提供するネットワークや組織である。	ハード面の支援及びソフト面の支援
Hackett and Dilts（2004）	BI とは，入居企業に監視やビジネス支援を含む戦略的な付加価値を持っている仲介システムを提供する共有のオフィス型施設である。	付加価値を持っている仲介システムとしての機能
Bruneel（2012）	BI とは，入居企業に共有のオフィス，ビジネス支援サービスとネットワークを提供する施設である。	ネットワークの提供
経済産業省（2013）	BI は，創業まもない企業等に対し，不足するリソース（部屋賃貸やソフト支援サービス等）を提供し，その成長を促進させることを目的とした施設である。	ハード面の支援及びソフト面の支援
NBIA（2015）	ビジネスインキュベーションは，入居企業に一連の資源と支援サービスの提供によって，企業の発展を促進する支援プロセスである。BI の主な目標は，雇用の創出，新技術の商品化と経済の促進である。	BI の目標

出所：筆者作成

フィスサービスといったハード面での支援を強調している。そして，Allen and Bazan（1990）は，上記のハード面のほかに，特に起業するためのスキル，知識やモチベーションのようなソフト面の支援も強調している。Allen and Bazan（1990）によると，BI は入居企業に支援サービスを提供する「ネットワーク」であり，「ネットワーク」という表現を，はじめて BI の定義の中に用いた。Hackett and Dilts（2004）は，BI が単なる支援施設ではなく，様々な支援サービスを含むシステムとして機能する付加価値を与える仲介システムであると強調している。Bruneel et al.（2012）は，BI を入居企業に共有のオフィス，ビジネス支援サービスとネットワークを提供する施設であると定義しており，特にネットワークの提供という機能を強調している。経済産業省（2013）は，BI が創業まもなく企業にハード面の支援（低賃金のスペース）とソフト面の支援を提供し，その成長を促進させることを目指す施設であると定義している。NBIA（2015）は，BI を卒業企業が雇用を創出し，新技術の商品化と地域経済の発展を促進する支援施設であると定義している。

以上に述べた先行研究から見ると，研究者，NBIA や経済産業省による BI の定義は多少異なるが，BI の機能（提供する支援サービス）を強調している定義が多い。また，初期の研究は，主に BI のハード面の支援を強調していることに対して，1990 年以降の研究はソフト面の支援も強調するようになってきた。つまり，BI の機能は，単なる賃貸部屋の提供から様々な支援を提供できる仲介システムまでに拡充してきた。そこで，本稿では，BI を入居企業（創業まもない企業）に部屋の賃貸というハード面の支援と起業するためのスキル，知識，ネットワークというソフト面の支援を両方提供し，入居企業の成長を促進させることを目指す施設であると定義する。

2. BI のネットワーク構築

2000 年代以降，BI のネットワーク構築に関する研究は注目を集めている。Bollingtoft and Ulhoi（2005）は，ソーシャル・キャピタル論を説明し，内部ネットワーク活動のメカニズムと入居企業の物理的な位置は，内部ネットワーク構築に影響を与えることを明らかにしている。具体的に言うと，BI 内部のネットワーキングとコラボレーションの駆動力は正式な契約のみで行われるものではなく，入居企業間の信頼関係によるものが大きい。また，物理的な位置は入居企業間のコラボレーションのパターンに影響を与える。さらに，入居企業がネットワークの構築に対して共通のビジョンを持つことが重要である。

丹生（2007）は，地方における BI の成果の決定要因に関して，「入居企業の間のコラボレーション」及び IM と入居企業のコミュニケーションの頻度が大事であると強調している。

McAdam and Marlow（2008）は，大学連携型 BI が提供するネットワークを通じて，入居企業がサプライヤー，顧客や投資者との信用力を構築しやすくなると指摘している。また，入

居企業は，BI 関連の様々なセミナーや会議に参加し，ほかの組織と情報や知識を交換できるだけでなく，最新の研究成果，技術や優秀な人材にもアクセスできる。さらに，入居企業は地理的近接性から，交流の機会を増やし，共通のビジョンを持つようになる。

稲垣・高橋（2011）は，メビック扇町の事例を取り上げ，IM が産業クラスターの形成に向けて様々なイベントを企画することで，入居企業の間，そして，入居企業と外部の「顔の見える関係」と「切磋琢磨の関係」の構築を促進できることを明らかにしている。

上記の研究は，BI がどのようなネットワーク構築活動を行っているかに関する実証研究であるが，ネットワーク論やソーシャル・キャピタル論を系統的に整理した上で実証研究を行うものは見られない。そのため，BI のネットワーク構築に関する研究は理論的なフレームワークがまだ欠如しているのが現状である。従って，本研究では，この理論的なフレームワークを確立するために，先にソーシャル・キャピタル論の発展系譜を整理する。

Ⅱ．ソーシャル・キャピタル論の発展系譜

本節は，ソーシャル・キャピタル論の発展系譜を整理するために，ソーシャル・キャピタル概念の発展を「概念の提唱段階」，「概念の発展段階」と「概念の拡張段階」に分けている。また，各段階における代表的な論者の研究を紹介した上で，本研究におけるソーシャル・キャピタルの位置づけを述べる。

1．概念の提唱段階

ソーシャル・キャピタル論の提唱は Hanifan（1916）に遡ることができる。Hanifan（1916）は，アメリカの農村高校教育とコミュニティの形成という文脈で，ソーシャル・キャピタルが不動産，個人資産と現金ではなく，人々が感じられる資源であり，生活において重要な役割を果たしていると指摘している。例えば，好意，パートナーシップ，同情と相互作用などは個人間や家庭間で社会紐帯（社会関係）を作り出すことができる[2)]。Hanifan（1916）によると，ソーシャル・キャピタルはコミュニティ内の人々の相互交流によって蓄積される。また，ソーシャル・キャピタルは人々のソーシャルニーズを満足させるほか，コミュニティの生活環境を改善する潜在的な動力を引き出すことができる[3)]。

それから 45 年後，Jacobs（1961）は，アメリカの大都市のコミュニティの形成という文脈で，コミュニティ内の近隣間で形成するソーシャルネットワークが都市にとって代替できないソーシャル・キャピタルであると強調している。また，Jacobs（1961）によると，ソーシャル・キャピタルは長期間に渡って発達し，強く，交差する個人間のネットワークであり，コミュニティにおいて，信頼，協力，共同行為の基礎となるものである[4)]。

さらに，Loury（1977）は，人種間の所得分布の不平等性の原因を論じる際に，伝統的な労働市場のほか個人の家族やコミュニティのバックグランドも重要な原因であると強調している。Loury（1977）は，教育レベルや仕事の経験という人的資源の要素が所得に影響を与えるが，従来の研究が人的資源の要素の差に導く要因を明らかにしていないと指摘している。その要因を説明するために，「標準的な人的資源の特徴の獲得を促進する社会ポジションの結果を表す」[5] というソーシャル・キャピタルの概念が大事である。ここではじめて人的資本とソーシャル・キャピタルの概念が結び付けられるようになった。

Hanifan（1916），Jacobs（1961）と Loury（1977）は，各自の研究の文脈において，ソーシャル・キャピタルの概念を論じたが，三者ともソーシャル・キャピタルを系統的に論じなかった。ソーシャル・キャピタルの概念提唱段階では，ソーシャル・キャピタルに関する研究はまだ端初的なものであったが，Hanifan（1916）も Jacobs（1961）もソーシャル・キャピタルを論じる際に，コミュニティ内のネットワークに重きに置いている。これが後の Coleman（1988）の研究に影響を与え，彼もソーシャル・キャピタルを論じる際にコミュニティ内のネットワークを強調している。

2. 概念の発展段階

ソーシャル・キャピタルの概念をはじめて系統的に論じたのは，フランスの社会学者の Bourdieu である。Bourdieu（1986）は，教育と階級分化の文脈で，ソーシャル・キャピタルを経済資本及び文化資本と並列し，ある条件の下において，ソーシャル・キャピタルと文化資本は経済資本に転換できると強調している[6]。Bourdieu（1986）によると，ソーシャル・キャピタルは「多かれ少なかれ制度化された相互の知己，認知関係の持続的なネットワークの所有と関連した，現実の，あるいは，潜在的な資源の総体」[7] である。その関係ネットワークは物理的な近接性を前提とする物質の交換及びその他の交換に基づいている。また，Bourdieu（1986）は，ソーシャル・キャピタルに対する時間や精力という形の投資を戦略的な投資として捉えている。つまり，ソーシャル・キャピタルは物質の利益を含む様々な利益をもたらし，従来の資本と同じように生産性を持っている[8]。

Bourdieu は，ソーシャル・キャピタル論の重要な概念であるネットワーク，物理的な近接性に基づく交換，時間や精力の投資を強調しており，ソーシャル・キャピタル論の発展系譜において大変重要な論者である。

次に，Coleman（1990）は，Loury（1977），Bourdieu（1986）の議論を踏まえ，ソーシャル・キャピタルをその機能によって定義した。ソーシャル・キャピタルは単一の実在ではなく，2 つの特徴を共有する非常に多様な実在である。その特徴は，①「ソーシャル・キャピタルはすべて社会構造のある側面からなる」，②「ソーシャル・キャピタルは構造内にいる個人

のある種の行為を促す」[9] という 2 つである。

ソーシャル・キャピタルは物理的な資本や人的資本と同じように，ソーシャル・キャピタルは完全に代替できなく，限定された特定の活動に限ってのみ代替できる[10]。さらに，ソーシャル・キャピタルの概念は，社会構造を資源として利用できるのを説明することによって，個人レベルの行為の多様な結果というミクロレベルの現象を説明することを助け，ミクロレベルからマクロレベルへの移行を行うことを助ける[11]。

さらに，ソーシャル・キャピタルは 6 つの形態を所有する。それは，「義務と期待」，「社会関係に内在する情報の潜在的可能性」，「規範と実効性のある制裁」，「支配関係」，「他の目的に充当される社会組織」と「意図的組織」である[12]。この 6 つの形態から見ると，Coleman（1990）はソーシャル・キャピタルの蓄積と利用を合理的行為者の行為として捉えている。特に合理的行為者は，自身の利益を達成するために意図的に他人に善意を施し，善意がかかった費用以上の利益という義務を他人に課す。他方，ソーシャル・キャピタルは譲渡不可能な性質，つまり，公共財の側面を持つ[13]。

このように，Coleman（1990）は，機能と特徴によってソーシャル・キャピタルを定義し，ミクロレベルでソーシャル・キャピタルの蓄積と利用が個人の合理的選択であると主張している。また，マクロレベルでソーシャル・キャピタルが譲渡不可能の公共財の側面を持つと主張している。金光（2009）によると，この折衷的な主張は後に公的・連帯的なソーシャル・キャピタル論（Putnam, 1993; 2000）と私的・競争的なソーシャル・キャピタル論（Burt, 1992）として，別々に展開していくことになる[14]。

3. 概念の拡張段階

公的・連帯的なソーシャル・キャピタル論の代表的な論者は Putnam（1993, 2000）である。Putnam（1993）はイタリアの制度のパフォーマンスを考察し，全体的に北イタリアの制度のパフォーマンスは南イタリアのそれよりはるかに優れていると指摘している。その理由は，北イタリアの経済のパフォーマンスが南イタリアより活発なだけでなく，北イタリアでは，同業組合，相互扶助や協同組合といった形で表す互酬性の規範と市民的積極参加のネットワークが，南イタリアの社会的・政治的関係が垂直的に構造化されたネットワークより，制度パフォーマンスを強く下支えしているからである[15]。

Putnam（1993）は，互酬性の規範と市民的積極参加のネットワークといった形態で表すものをソーシャル・キャピタルと呼んでいる。ソーシャル・キャピタルは，集合行為の促進によって社会の効率性を改善できる信頼，規範とネットワークといった社会組織の特徴を指す[16]。また，Putnam（1993）によると，信頼，規範やネットワークのようなソーシャル・キャピタルは利用されるほど増加し，使用しないと枯渇する資源である。それに加え，ソー

シャル・キャピタルは，私的財である通常の資本と異なり，特定の人に属する私的財ではなく，ある種の公的財である[17]。

さらに，Putnam（2000）は，アメリカの市民参加の衰退との文脈で，ソーシャル・キャピタルを「個人間のつながり，すなわち社会的ネットワーク，およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」と定義している。つまり，ソーシャル・キャピタル論において中核となるアイデアは，社会ネットワークが互酬性と信頼性という価値を持つということにある[18]。

Putnam（2000）によると，ソーシャル・キャピタルは，「橋渡し型（bridging）」と「結束型（bonding）」に分類できる。「橋渡し型ソーシャル・キャピタル」とは，「外向きで，様々な社会的な亀裂をまたいで人々を包含するネットワーク」である。「結束型ソーシャル・キャピタル」とは，「メンバーの選択あるいは必要性によって，内向きの指向を持ち，排他的なアイデンティティと等質な集団と強化していくもの」である[19]。橋渡し型ソーシャル・キャピタルは，外部資源へのアクセスや情報伝播において優れていることに対して，結束型ソーシャル・キャピタルは，特定の互酬性を安定させ，連帯を動かしていくことに優れている[20]。

次に，私的・競争的なソーシャル・キャピタル論の代表的な論者は Burt（1992）である。Burt（1992）は，ネットワークがもたらす情報利益を論じる際に，他の条件が一定とすれば，規模が大きくて多様なネットワークの情報利益は，小さくて同質的なネットワークの情報利益より多いと言っている。しかし，ネットワークの規模はプラスマイナスの両面がある。単に規模が大きいだけで多様性を欠くネットワークは，重大な欠陥を生じる恐れがある。例えば，重複するコンタクトは同じような人に導き，重複する情報しか提供できない[21]。

他方，密度の低いネットワークは密度の高いものより効率性が高い。密度の高いネットワークの人々の間の関係が強く，人々は他の人が既に知っている情報を知っており，全員が重複的な情報や機会を把握する可能性が高い。これを改善するために，時間とエネルギーをかけ，密度の高いネットワークに重複しないコンタクトを加える必要がある（Burt, 1992）。

Burt（1992）は，「構造的な空隙」という言葉を用いて非重複のコンタクトの間の分離を表す。非重複のコンタクトは，構造的な空隙によって結ばれている。構造的な空隙とは，2 つのコンタクト間の非重複の関係である。コンタクトの間に空隙が生じた結果として，2 つのコンタクトは，重複ではなく加算的な利益を生み出すことである。すなわち，「構造的な空隙」は情報利益をもたらす[21]。例えば，図 1 に示すように，プライヤー[22] A1 と B，C，D はコンタクトが重複しており，閉鎖的な関係を形成している。つまり，A1 と B，C，D の間の情報が重複していると考えられる。他方で，A2 と E，F，G はコンタクトしているが，E，F，G がコンタクトすることなく，E，F，G の間は重複な関係が存在しないため，構造的な空隙が生まれる。また，A2 は E，F，G という三者から情報を獲得できるため，加算的な利益が生じる。

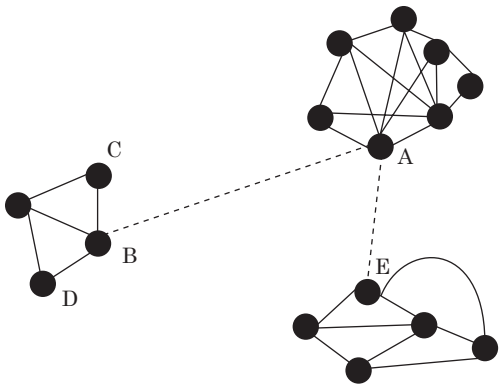
図 1　重複のコンタクトと構造的な空隙

出所：筆者作成

構造的な空隙が最適化されたネットワークを持つプライヤーは，より多くの報酬を手にする機会に触れられる上に，彼らが追い求める選択機会の中でも最も好ましい条件を手にする可能性が高くなる。つまり，このようなプライヤーは統制利益や「漁夫の利」を享受できる[23)]。

Burt（1992）は，Granovetter（1973）の「弱い紐帯論」の議論を行い，「構造的空隙」の強さを強調している。Granovetter（1973）は，「転職」において，行為者と情報提供者の接触頻度，接触期間，連鎖の長さを用い，両者の関係の強さを測っており，強いネットワーク紐帯を利用した者より弱いネットワーク紐帯を利用した転職者のほうが望ましい転職の結果を得ていると指摘している。Burt（1992）は「弱い紐帯論」が構造的空隙と同じような現象を述べていると指摘している。具体的に言うと，図 2 は弱い紐帯論の議論と構造的空隙のつながりを表している。実線は強いネットワークを表していることに対して，点線は弱いネットワークを表している。A，B，E はそれぞれのクリーク内の他のアクターと強いネットワークを構築している。また，A と B，E は弱いネットワークを構築している。つまり，図 2 においては，3 つの構造的空隙が存在する。それは，①A 自身のクリーク全員と B のクリーク全員の間の構造的な空隙，②A 自身のクリーク全員と E のクリーク全員の間の構造的な空隙，③B と E の間の構造的な空隙である。

図 2　構造的空隙と弱い紐帯



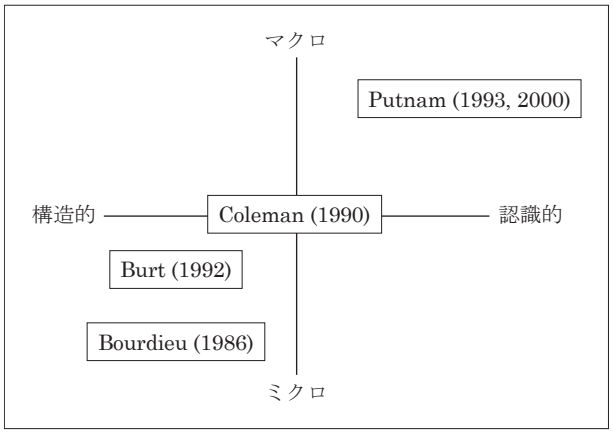
出所：Burt（1992），安田訳（2006），21 頁より一部修正

また，概念の拡張段階には，Bourdieu，Coleman，Putnam や Burt などの代表的な論者のソーシャル・キャピタルに対する議論はどのように相違点があるのか，もしくは，どのように分類できるかを分析する研究が出現した。

Lin（1999）によると，ソーシャル・キャピタルがもたらすメリットを享受する主体は個人と集団に分けられる。そのため，ソーシャル・キャピタルに対する議論は個人の視点と集団の視点に分けられる。個人の視点から，ソーシャル・キャピタルに関する議論は，個人がどのように社会関係に投資するかと，個人がどのように社会関係に埋め込まれる資源を利用し，利益を獲得するかを強調する。Bourdieu（1986）と Coleman（1990）の一部の内容及び Burt（1992）は個人の視点からソーシャル・キャピタルに対する議論である。他方，集団の視点から，ソーシャル・キャピタルに関する議論は，集団がどのようにソーシャル・キャピタルを公共財として維持しつつ発展させるかと，このような公共財がどのように集団内の人々に機会をもたらすかに重きを置く。Bourdieu（1986），Coleman（1990）の一部の内容と Putnam（1993）は，集団の視点からのソーシャル・キャピタルに対する議論である[24)]。

稲葉（2014）は，上記した代表的な論者たちのソーシャル・キャピタルに対する議論が異なるため，これらの論者の基本的な立場を一目で分かるように，横軸に構造的か認識的か，縦軸にマクロかミクロかという基準を設定し，論者の立場を分類している。図 3 は，ソーシャル・キャピタルの主な論者の基本的な立場を表すものである。稲葉（2014）によると，Putnam（1993, 2000）は，社会全体の規範や信頼に重きを置いているため，認識的かつマクロレベルからソーシャル・キャピタルを捉えている。他方で，Bourdieu（1986）や Burt（1992）は，個人のネットワークを重視するため，構造的かつミクロレベルからソーシャル・キャピタルを捉えている。また，Coleman（1990）は，学校やコミュニティ内のネットワーク，規範と信頼を

図 3　ソーシャル・キャピタルの主な論者の基本的な立場



出所：稲葉（2014）6 頁，図表 1－1 より一部修正

重視する[25]。

西口・辻田（2017a）は，多義的なソーシャル・キャピタル論は境界とメンバーシップが明確なコミュニティの行為を分析することには不十分であると指摘している。また，この理論的な穴を補うために，西口・辻田（2017b）は，近江商人，中国の温州企業家とトヨタのサプライチェーンの事例から，より限定的な中位の概念として「コミュニティ・キャピタル」を提唱している。

西口・辻田（2017a）によると，コミュニティは「血縁・同郷者のネットワーク，同一地域の居住者からなる地域共同体，取引や雇用関係によって形成され，主に非同郷者からなる企業集団，また，趣味や価値観を共有する人々のサークルやボランティア組織などのように，成員や非成員を区別する基準が明確な集団」[26] を指す。コミュニティ・キャピタルとは，特定のコミュニティにおける成員間に生じた交換されて蓄積される限定的な関係資本であり，成員たちによってのみ有効裏に利用しうる目に見えない共通財を意味する。

また，西口・辻田（2017b）は「社会的刷り込み」，「同一尺度の信頼」と「準紐帯」という3つの相互に連動できる概念を用い，コミュニティ・キャピタル概念の有用性を説明している。コミュニティに所属する成員たちが，長年の濃密な関係や共通体験によって生み出し，そのコミュニティに埋め込まれる一定のアイデンティティーである「刷り込み」は，コミュニティの繁栄に極めて大きな影響を与える。さらに，特定のメンバーシップによって明確な境界が定まるコミュニティの目的の達成に奉仕し，その所属する成員同士でのみ遵守される「同一尺度の信頼」関係がコミュニティの繁栄にとって重要である。それに加え，境界の明確なコミュニティの目的の達成に奉仕する成員間で維持される「準紐帯」が重要である[27]。

本節は，「概念の提唱段階」，「概念の発展段階」と「概念の拡充段階」という3つの段階に分けた上で，ソーシャル・キャピタル論の発展系譜を整理した。表2は発展系譜，及びそれぞれの論者の主張内容と特徴を表すものである。本稿は，Lin（1999）と稲葉（2014）を踏まえ，創造・利用主体によって，ソーシャル・キャピタルをマクロ・メゾ・ミクロという3つのレベルに分類する。具体的に言うと，マクロレベルのソーシャル・キャピタルは，しばしば国の制度パフォーマンスと市民参与という政治学で用いられる。一方，ミクロレベルのソーシャル・キャピタルは個人の昇進，転職などによく用いられる。また，メゾレベルのソーシャル・キャピタルは組織・コミュニティの繁栄につながるソーシャル・キャピタルを強調する。なお，Lin（1999）が指摘しているように，Bourdieu（1986）と Coleman（1988, 1990）などのマクロレベルとミクロレベル両方の特徴を持つソーシャル・キャピタルに関する議論が存在する。

本稿は，産業クラスターにおける BI が外部の組織と構築するソーシャル・キャピタル，そして，IM が入居企業と構築するソーシャル・キャピタルは産業クラスターの形成・発展に与

表 2　ソーシャル・キャピタル論の発展系譜

発展段階	論者	研究対象	レベル	理論の内容
概念提唱	Hanifan（1916）	コミュニティ形成	メゾ	好意，パートナーシップ，同情や相互作用で形成される社会紐帯
	Jacobs（1961）	コミュニティ形成	メゾ	ネットワーク，信頼，協力，共同行為
	Loury（1977）	人類の所得	マクロ	社会ポジションを表す
概念発展	Bourdieu（1986）	教育と階級分化	ミクロ・マクロ	持続的なネットワーク所有と関連した潜在的な資源
	Coleman（1988, 1990）	コミュニティ，高校教育	ミクロ・マクロ	義務と形態，社会関係に潜在する可能性，規範と実効性のある制裁，支配関係，意図的組織
概念拡張	Burt（1992）	取引関係，昇進	ミクロ	構造的空隙がもたらす情報利益と統制利益
	Putnam（1993, 2000）	国の制度パフォーマンスと市民参与	マクロ	社会的ネットワーク，互酬性と信頼の規範
	西口・辻田（2017a） 西口・辻田（2017b）	コミュニティの繁栄	メゾ	刷り込み，同一尺度の信頼，準紐帯

出所：筆者作成

える影響を強調するため，BI 及びそれを中心とするメゾレベルのソーシャル・キャピタルや IM のミクロレベルのソーシャル・キャピタルに重きを置いている。

Ⅲ．経営学におけるソーシャル・キャピタルに関する先行研究の考察

金光（2011）によると，Burt（1992）以降，ソーシャル・キャピタルの勢力図は大きく変わり，知識マネジメントといった経営学のより本質的なテーマに関連した研究も重視されるようになってきた。本節は，経営学におけるソーシャル・キャピタルの概念を理解するために，Adler and Kwon（2002）と金光（2011）をはじめとする経営学におけるソーシャル・キャピタルに関する研究を考察する。

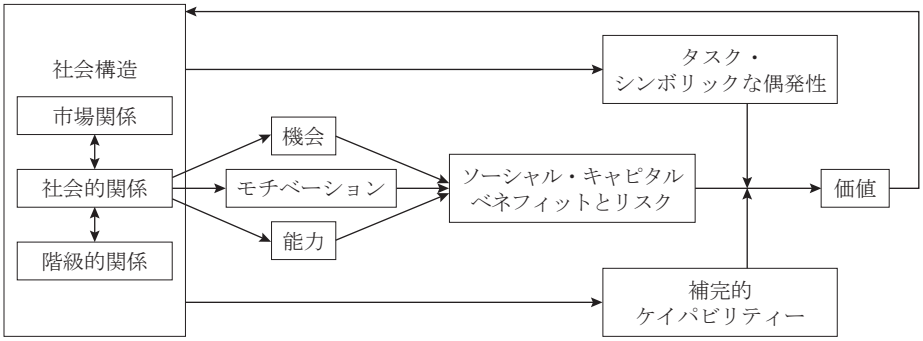
Adler and Kwon（2002）は，ソーシャル・キャピタル論の包括的なレビューを行い，理論の源泉，ベネフィットとリスク，偶発性をまとめる概念のフレームワークを提唱している。Adler and Kwon（2002）によると，ソーシャル・キャピタルは，社会関係の構造から生まれる善意（good will）である。善意は，友達や知り合いが提供した同情，信頼と寛容性のことを指し，ある種の行動を促進できる。

Adler and Kwon（2002）は，ソーシャル・キャピタルがある種の資本としての 7 つの特徴を挙げている。それは，①他の資本と同じように，将来のベネフィットのフローを期待し，他の資源を投入しうる長期的な資産である。②他の資本と同じように，ソーシャル・キャピタルも転用可能であり，兌換的である。例えば，アクターの友情は情報の収集やアドバイスのような他の目的に用いられる。また，社会ネットワークにおける位置の優位性は経済的な優位

性に転換できる。③ソーシャル・キャピタルは他の資本の補完として使われる。④金融資本と異なり，物的資本や人的資本と同じように，ソーシャル・キャピタルは維持する必要がある。社会的結合は定期的に更新や再確認が不可欠である。人的資本と同様に，物的資本と異なり，ソーシャル・キャピタルは予測できる償却率が存在しない。⑤きれいな空気や安全な街と同じように，他の資本と異なり，ソーシャル・キャピタルはベネフィットを享受できる人の個人資産ではなく，ある種の公共財である。⑥他のすべての資本と異なり，ソーシャル・キャピタルはアクターに内在するのではなく，アクター間の関係に存在する。⑦経済学者が「資本」と呼ぶ他の資本と異なり，定量的な尺度で測りにくい[28]。

さらに，図 4 は，Adler and Kwon（2002）が提唱したソーシャル・キャピタルの価値の因果関係を表すものである。社会構造は市場関係，社会的関係と階級的関係に分類されており，ソーシャル・キャピタルは社会関係から生まれる。ソーシャル・キャピタルの価値のベネフィットとリスクは，ネットワークにおける位置づけによって決められる機会のほか，アクターのモチベーションと能力によって決められる。しかし，文脈的な効果を持つ偶発性に関する要素がソーシャル・キャピタルの価値に側面から影響を与える。その 2 つの要素は，規範や信念が作用するという「タスク・シンボリックな偶発性」と交換相手が持つ資源自体がソーシャル・キャピタルという「補完的ケイパビリティー」である[29]。

図 4　ソーシャル・キャピタルの価値の因果関係図



出所：Adler and Kwon（2002），p.23，図 1

一方，日本における経営学分野のソーシャル・キャピタル研究は，金光（2009）が代表的である。金光（2009）は，ソーシャル・キャピタルを資源動員的社会的関係資本論，連帯的社会的関係資本論と協働的知識資本論に分けている。まず，資源動員的社会的関係資本論は，個人，集団と企業のレベルで捉えられており，個人，集団と企業が，就職，昇進のような私的の成功を達成するために，社会ネットワークを資源として動員し，私的にリターンを得るようなソーシャル・キャピタルに注目する。それに対して，連帯的社会的関係資本論は，焦点を小集団から国家や地域的共同体に移すことによって，ソーシャル・キャピタルの公共的側面に注目

する。最後に，この 2 つの社会的関係資本論の間に協働的知識資本論という第 3 の社会的関係資本論を位置づけていることは極めて大事である。その理由は，知識の創造や変換，知識移転の文脈でソーシャル・キャピタルが大きな注目を集めいているからである。また，現代の企業経営研究において，知識の創造，蓄積と活用という認識から，社会関係に埋め込まれた暗黙知を形式知に変換し，新たな知識とイノベーションを創出することを重視する議論に注目が寄せられているからである[30)]。

従って，次節では，ソーシャル・キャピタルは，具体的に知識の創造といかなる関係があるのか，また，ソーシャル・キャピタルはどのようなメカニズムを通じて知識の移転に影響を与えるのかを論じる。

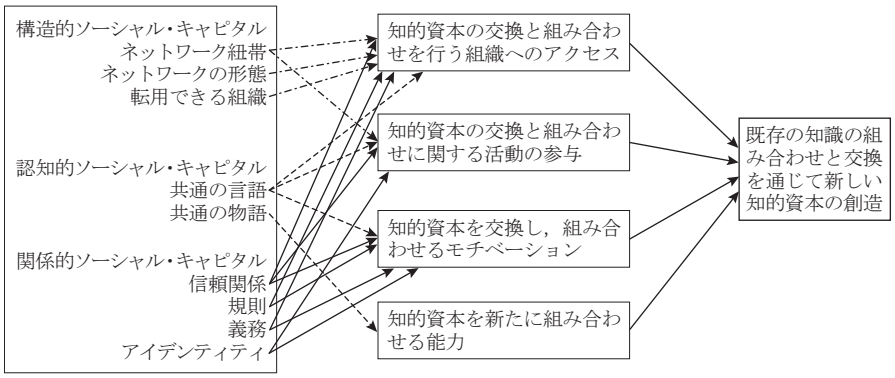
Ⅳ．ソーシャル・キャピタルの機能と知識創造

Nahapiet and Ghoshal（1998）は，ソーシャル・キャピタル，知的資本[31)]と組織の優位性の関係を分析し，ソーシャル・キャピタルを 3 つの側面に分けている。すなわち，ソーシャル・キャピタルは構造的ソーシャル・キャピタル，認知的ソーシャル・キャピタルと関係的ソーシャル・キャピタルに分けられる。構造的ソーシャル・キャピタルは，人々の接触のすべてのパターンである。つまり，人間は誰と接触するか，また，どのように接触するか。この側面の最も大事な内容は，人間関係のネットワーク紐帯の存在，ネットワークの緊密度，連接性と階級のようなネットワークの形態と転用できる組織である。認知的ソーシャル・キャピタルは共同の参与と団体の意義を提供できる資源である。認知的ソーシャル・キャピタルの最も大事な内容は，共通の言語と共通の物語である。関係的ソーシャル・キャピタルは，長期間の相互作用に渡って形成されてきた尊敬と友情のような個人関係である。こうした個人関係は，人々の行為に影響を与える。関係的ソーシャル・キャピタルの最も大事な内容は，信頼，規範と制裁，義務と期待，アイデンティティーである。

また，Nahapiet and Ghoshal（1998）は，ソーシャル・キャピタルの 3 つの側面は，「知的資本の交換と組み合わせを行う組織へのアクセス」，「知的資本の交換と組み合わせに関する活動の参加」，「知的資本の交換と組み合わせを行うモチベーション」と「知的資本を新たに組み合わせる能力」という 4 つの条件を介して，知的資本の創造にいかに影響を与えるかを分析している。その内容は，図 5 に示すとおりである。

Nahapiet and Ghoshal（1998）が提唱したソーシャル・キャピタルの 3 つの側面は，後のソーシャル・キャピタルと知識の移転・創造に関する研究に頻繁に用いられている。例えば，Inkpen and Tsang（2005）は，Nahapiet and Ghoshal（1998）を参考にしており，ソーシャル・キャピタルを構造的ソーシャル・キャピタル，関係的ソーシャル・キャピタルと認知的

図 5　ソーシャル・キャピタルと知的資本の創造の関係 [32)]



出所：Nahapiet and Ghoshal（1998），p.251，図 1

ソーシャル・キャピタルに分けている。そして，Inkpen and Tsang（2005）はこの 3 つの側面の内容をより精緻化している。構造的ソーシャル・キャピタルの内容は，ネットワーク紐帯，ネットワーク形態とネットワーク安定性である。関係的ソーシャル・キャピタルの内容は信頼関係である。認知的ソーシャル・キャピタルの内容は，共通の目標と共通の文化である。

さらに，Inkpen and Tsang（2005）は，知識移転を行うネットワークを企業内の部門間のネットワーク，企業間の戦略的な提携のネットワークと産業クラスター内の企業間のネットワークという 3 つの種類に分類している。それに加え，Inkpen and Tsang（2005）はソーシャル・キャピタルと知識移転の条件を結びつけ，異なる種類のネットワークにおける知識移転を促進する条件を指摘している。表 3 はその知識移転を促進する条件を表している。

表 3　ソーシャル・キャピタルの側面から見る知識移転の促進条件

ソーシャル・キャピタルの側面		企業内部門間	戦略的提携	産業クラスター
構造的	ネットワーク紐帯	メンバー間の個人の移転	多くの交換活動からなる強い紐帯	他のメンバーへの近接性
	ネットワーク形態	本社の権利の分散	パートナー間の多様な知識の連携	多数のクリーク間の関係を維持する弱い紐帯と橋渡し
	ネットワーク安定性	低い転職率	知識移転への非競争的なアプローチ	安定的な個人関係
関係的	信頼	明確な賞罰の規則	将来に対する期待	社会的紐帯に埋め込む商業的な交換
認知的	共通の目標	共通のビジョンと目標	明確な目標	連携から生まれる相互作用
	共通の文化	地域文化への適応	多様な文化	非正式的な知識移転を監督するルール

出所：Inkpen and Tsang（2005），p.155，表 2

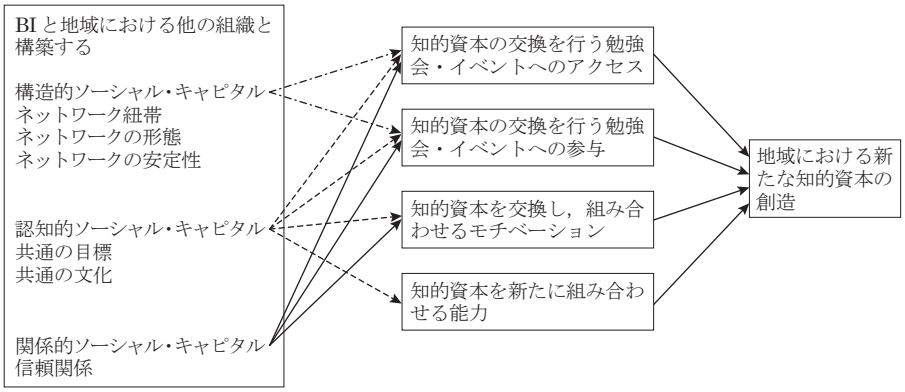
Nahapiet and Ghoshal（1998）は，ソーシャル・キャピタルを構造的，認知的と関係的という 3 つの側面に分けているが，この 3 つの側面の関係を明確にしていない。実際に，この 3 つの側面の内容はお互いに関連している。例えば，構造的ソーシャル・キャピタルのネット

ワーク紐帯の強弱は，関係的ソーシャル・キャピタルの信頼関係から影響を受ける。また，関係的ソーシャル・キャピタルの信頼関係は，認知的ソーシャル・キャピタルの共通の言語や共通のビジョンから影響を受ける。

さらに，ソーシャル・キャピタルと知的資本の創造の関係（図 5）は，上述した Adler and Kwon（2002）が提唱するソーシャル・キャピタルの価値の因果関係図（図 4）と同じ原理を表している。この原理を BI が地域における外部の組織と構築するソーシャル・キャピタルと知識の創造の関係という文脈に持ち込むと，BI は外部の組織との関係によって構築するソーシャル・キャピタルを通じて，互恵的な情報や知識を交換する勉強会に参加し，イベントへのアクセス機会を把握できる。また，BI も外部の組織も互恵的な情報や知識を交換して組み合わせるモチベーションを持っていれば，地域における新しい知識が創造されやすくなると考えられる。さらに，BI は，獲得した知識を新たに組み合わせ，入居企業と構築するソーシャル・キャピタルを通じて情報や知識を交換する。このように，BI は，入居企業が競争相手より新しい情報や知識を獲得できるようにさせ，入居企業の業績の向上を促進する。

以上から，本稿は，Nahapiet and Ghoshal（1998）と Inkpen and Tsang（2005）を結びつけ，BI と関連するソーシャル・キャピタルがどのように地域における新たな知識の創造につながるかに関する仮説モデルを提唱する。図 6 はこの仮説モデルの内容を表している。

図 6　BI の外部ソーシャル・キャピタルと知識創造の関係



出所：Nahapiet and Ghoshal（1998），Inkpen and Tsang（2005）を参考に筆者作成

V．産業クラスターにおけるソーシャル・キャピタルの役割

1．産業クラスターとは何か

産業クラスターは，Marshall（1890）の特定産業の地理的集中（産業集積）という経済地理学の概念から発展されてきた概念である。Marshall（1890）によると，産業集積は，「地域に

おける専門家とノウハウのプール，フレキシブルな労働の文化，濃密な交流から生み出される信頼と協力，運送コストと取引コストの低下，専門化されたサービス，流通ネットワーク供給構造といったインフラの構築」[33] などの外部効果を生み出す。

また，Porter（1998）は競争戦略に基づくクラスターの概念を議論し，クラスターを「特定分野における関連企業，専門性の高い供給業者，サービス提供者，関連業界に属する企業，関連機関（大学，規格団体，業界団体など）が地理的に集中し，競争しつつ同時に協力している状態」[34] と定義している。

さらに，Porter（1998）は産業クラスターを提唱する理由を 3 つ挙げている。第 1 に，グローバル経済の下で，「立地の役割」が新たに認識されていることである。企業レベルの競争戦略にとっても，国や自治体の競争力にとっても，立地が大きな役割を果たしている。また，「ある特定の事業分野における突出した成功に必要な条件として，どの国，地域，都市圏でもクラスターの形成が挙げられる」[35] と指摘した。

第 2 に，クラスターという視点は，競争の本質や競争優位の源泉を捉えやすいことである。「クラスターは産業よりも幅が広いので，企業間や産業間の重要なつながりや補完性，或いは技術，スキル，情報，マーケティング，顧客ニーズなどのスピルオーバー（溢出効果）を捉えることができる。…こうした結びつきは，競争や生産性，特に，新規事業の形成や，イノベーションの方向性やペースを左右する根本的な要素になる」[36]。

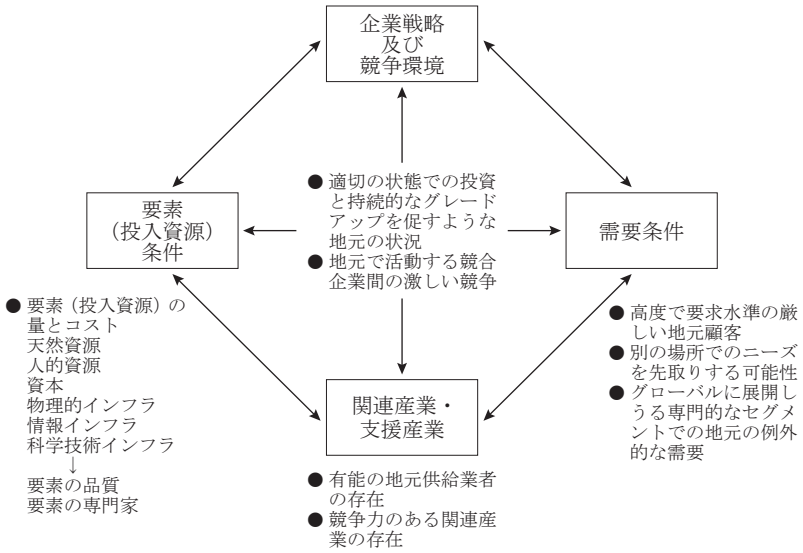
第 3 に，立地の競争優位はダイヤモンドモデルによって決められ，そのグレードアップを目指すべきことである。競争優位は生産性の向上によって決められているので，クラスター視点は生産性を高める競争優位の獲得の仕方を示す。図 7 のダイヤモンドモデルはクラスターにおける競争優位を獲得する仕方を表している。

さらに，金井（2003）は，Porter（1998）が提唱した産業クラスターの概念を構成する重要な要件として，次の 3 点を検討している。①クラスターの構成と範囲：特定の分野において，相互に関連する企業や機関が一定の地域に集積する，②シナジー効果：集積地内で各機関の相互作用によって生み出されたシナジー効果，③クラスター内主体間の関係：集積のなかでは協調関係のみならず競争関係も存在する[37]。

まず，クラスターの構成と範囲を見ると，クラスターは必ずしも IT やバイオのような先進的な産業だけでなく，ワイン，家具のような伝統的な産業によって，形成される可能性があると考えられる。また，クラスターにおける特定の分野には，最終製品やサービスだけではなく，それらと関連する原材料，流通，アフターサービスなどの垂直統合及び水平方向上の産業も含まれている。さらに，クラスターには単に関連する産業や企業のみならず，大学，シンクタンク，職業訓練機関なども含まれる。その理由は，知識基盤社会に入るとともに，従来の生産要素である土地，天然資源より知識の役割がますます重要になっており，大学やシンクタン

クなどの機関は知識の生産者や伝播者として重要な役割を果たしているからである。最後に，「一定の地域」を捉えるには 100 ～ 200 マイルのフェース・ツー・フェースで交流できる範囲が目安である。フェース・ツー・フェースで交流できる範囲は，クラスターの成功の基盤としての地域に埋め込まれる情報や知識，つまり，移転しにくい地域に粘着する情報や知識の重要性を示唆している。

図 7　ダイヤモンドモデル



出所：Porter（1998）『競争戦略論Ⅱ』83 頁，図 2-11。

次に，クラスターのシナジー効果を見ると，クラスターとは相互に関連している企業，研究機関や政府のような多様な機関からなるシステムであり，クラスターには各機関の相互作用によって生み出された全体の効果は各機関の効果の総和より大きなシナジー効果が存在する。このように，クラスターにおけるシナジー効果は地域の競争優位性を生み出す。最後に，成功するクラスターの内部では，企業や組織の間で構築されたネットワークに基づく協調関係のみならず，生産性の向上とイノベーション創出意欲を刺激し合い，促進できる企業や組織間の競争関係も重要である。

2. 産業クラスターにおけるソーシャル・キャピタルの役割

企業，供給業者と各種組織がある立地に集積しても，これら組織の間に社会的な関係が存在しなければ，価値は創造されにくい。Porter（1998）はクラスター論を検討する際に，クラスター理が地理的な立地におけるネットワーク関係の構造が企業にメリットを生み出すメカニズムを解明することにより，ソーシャル・キャピタルの概念をさらに拡張できると指摘してい

る。Porter（1998）によると，交流の繰り返しや地域内の相互依存を通じて育まれた，信頼や組織相互浸透によるメリットは，クラスター内部の交流を促進し，イノベーションを加速し，新規事業の形成をもたらす[38)]。従って，産業クラスターの概念を経営学・組織論の視点から考察するならば，その中で最も大事な視点の1つはネットワーク論やソーシャル・キャピタル論の視点だと言える。

西山（2003）は，産業クラスターの形成・発展に向けて人的ネットワークの役割を強調している。産業クラスターの形成に向けて，ビジョンを持って地元資源を結びつける戦略家とネットワークを通じて人材の流動化が重要である。また，産業クラスターの発展に向けて，柔軟な地域ネットワークと内外をつなぐネットワーク企業が必要不可欠である。なお，柔軟な地域ネットワークは，知的資源の活用による差別化の確保，円滑な情報の流れと創業しやすい環境によって支えられる。内外をつなぐネットワーク企業は，地域における機関間のコーディネート機能，知識の移転機能と最適調達機能を果たしている[39)]。

さらに，西山（2004）は，ネットワーク論やソーシャル・キャピタル論に基づいて，産業クラスターを「地域特定分野に関する産学官の構成部門間のソーシャル・キャピタル，即ち，人材の流動化をきっかけにイノベーションの創出に向けた信頼関係により，重層的な起業家的なネットワークが構築されている状態である」と定義している[40)]。

西山（2004）は，前述したビジョンを持って地元資源を結びつける戦略家をインフルエンサーと呼んでいる。インフルエンサーはファースト・レベルとセカンド・レベルに分けている。ファースト・レベル・インフルエンサーは高い位置でリーダーシップを発揮する役割を担っており，一般に高いレベルの教育を受けて，周囲から高い信頼を得ている。セカンド・レベル・インフルエンサーは，ファースト・レベル・インフルエンサーをサポートし，各部門間のネットワークをマネジメントする役割を担っている[41)]。

西山（2004）は，産業クラスターの形成・発展に向けて，インフルエンサーは4つの役割を果たしていると指摘している。①形成（開始）段階において，インフルエンサーは変化に向けたモチベーションの形成とそれを支えるネットワークの構築を支援し，イノベーション創出に向けた地域機関の信頼関係を醸成する。②形成（孵化）段階において，インフルエンサーはスピンオフ企業の創出等，人材の流動化に関する環境整備を通じて優先順位の共有化を図っていく。こうした人材の流動化がもたらす前職場の共通体験に基づく地域イノベーションを創出するための信頼関係のベースが生まれていく。③発展（実行）段階において，インフルエンサーは柔軟な知的コミュニティを構築するために外部から必要人材と企業の定着・流入を支援する。これを通じて柔軟な知的コミュニティの構築を促し，地域のイノベーションを創出するための信頼関係が自己増殖の段階に入っていく。④発展（改善・再生）段階において，継続的に環境変化に対応する柔軟な知的コミュニティを構築するためにインフルエンサーは他のインフ

ルエンサーとの橋頭堡を作ることとともに，地域の継続的変化を支援する[42)]。

一方，ソーシャル・キャピタルによる地域産業クラスターの形成・発展の促進に関する実証研究も多くなされている。Myint et al.（2005）は，ケンブリッジ地域における新しいベンチャー企業の創出に対するソーシャル・キャピタルの機能を論じている。ケンブリッジ地域において，起業家の積極的な連携から生まれる高いレベルの構造的ソーシャル・キャピタルと，長時間に渡って一緒に仕事する人々の結びつきから生まれるハイレベルの関係的ソーシャル・キャピタルが存在する。構造的ソーシャル・キャピタルは産業クラスターが効率的に機能を果たすことにとって重要である。企業間の連携は，戦略的提携とアウトソーシング活動の機会を増やすことができる。また，構造的ソーシャル・キャピタルは，産業の傾向，政策，実験室と新しいビジネス機会に関する情報のチャンネルを提供することができる。関係的ソーシャル・キャピタルは，有望なビジネス機会の評価，投資者と起業家の連携の形成と経験の豊富なマネジメントチームの構築に用いられる。

Cook et al.（2005）は，ソーシャル・キャピタルと地域競争力の相関関係が，ソーシャル・キャピタルと企業競争力の相関関係ほど明らかではないが，より多くの知識型企業が立地する地域の方がより多くのソーシャル・キャピタルを有すると指摘している。

Molina-Morales and Martinez-Fernandez（2010）は，スペインの地域における製造業企業と他の組織の間の相互作用，信頼関係と共通ビジョンによって企業のソーシャル・キャピタルを測定し，企業のイノベーション能力，ソーシャル・キャピタルと産業集積の関係に関する実証研究を行った。その結論は，産業集積，ソーシャル・キャピタルと地域の組織の参与それぞれが企業のイノベーション能力に影響を与えるということである。

西山（2004）は，産業クラスターの形成・発展において，インフルエンサーの役割を論じている。また，産業クラスターの形成・発展に向けた人材の流動化の重要性を強調している。他方，Myint et al.（2005），Cook et al.（2005）と Molina-Morales and Martinez-Fernandez（2010）は，実証研究を通じて，産業クラスターにおけるソーシャル・キャピタルが，企業の競争力や企業のイノベーション能力にとって積極的な役割を果たしていることを明らかにしている。しかし，これらの研究の対象はすべて起業家や企業である。地域における起業家や企業は最初から豊富なソーシャル・キャピタルを持っているわけではなく，人や組織との相互作用で蓄積されてきていると考えられる。このような起業家や企業のソーシャル・キャピタル及びそのベネフィットを増やすために，BI の存在が大事であると考えられる。

BI は地域におけるセカンド・レベル・インフルエンサーの役割を果たしていると考えられる。その理由として，BI は資金や知識などの資源を創業まもないベンチャー企業に提供するからである。しかし，本来，BI はこれらの資源を所有するわけではなく，設立・運営主体及びその関係者と構築するソーシャル・キャピタルから資源を獲得している。従って，地域にお

ける各種の資源を所有する組織とのネットワークをマネジメントすることは，BI 及びその入居企業にとって極めて大事である。この意味で，BI はセカンド・レベル・インフルエンサーの機能を果たしている。

お　わ　り　に

本稿は，BI が産業クラスターの形成・発展にどのように寄与するかに関する仮説モデルを提唱した。図 8 は本稿の仮説モデルを表している。以下にそれぞれの仮説についてまとめる。

BI は創業まもないベンチャー企業に資金や知識などの資源を提供する。しかし，本来，BI はそれらの資源を持っているわけではなく，設立・経営主体及びその関係者から様々な資源を獲得した上で，入居企業に提供する。他方，これらの資源はネットワークやソーシャル・キャピタルに埋め込まれている。従って，設立・経営主体及びその関係者を含む地域の外部の組織との関係をマネジメントするのが BI にとって極めて重要である。また，産業クラスターの形成・発展に向けたファースト・レベル・インフルエンサーとセカンド・レベル・インフルエンサーが存在する。セカンド・レベル・インフルエンサーは各部門間のネットワークをマネジメントする役割を担っている。以上のことから，仮説 1 を「BI は産業クラスターにおけるセカンド・レベル・インフルエンサーの役割を果たしている」とした。

BI は地域における外部の組織と構築するソーシャル・キャピタルを通じて，地域における新しい知識の創出を支援する。具体的には，BI は外部の組織の関係によって構築する構造的ソーシャル・キャピタルを通じて知識の交換を行う活動へのアクセスをベンチャー企業に提供し，地域における新しい知識の創造を支援する。以上のことから，仮説 2 を「BI は外部の組織との構造的ソーシャル・キャピタルを通じて，地域の新しい知識の創造を支援する」とした。

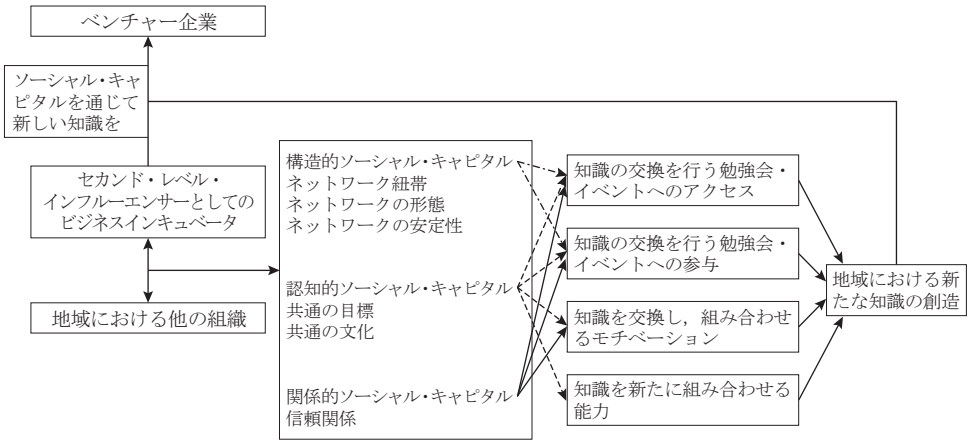
また，BI は外部の組織の関係によって構築する認知的ソーシャル・キャピタルを通じて知識の交換を行う活動へのアクセスをベンチャー企業に提供する。それに加え，BI と外部の組織は認知的ソーシャル・キャピタルを通じて，知識を交換して組み合わせるモチベーションや能力をベンチャー企業に提供する。以上のことから，仮説 3 を「BI は外部の組織との認知的ソーシャル・キャピタルを通じて，地域の新しい知識の創造を支援」とした。

さらに，BI は外部の組織の関係によって構築する関係的ソーシャル・キャピタルを通じて知識の交換を行う活動へのアクセスをベンチャー企業に提供するほか，知識を交換して組み合わせるモチベーションも提供する。以上のことから，仮説 4 を「BI は外部の組織との関係的ソーシャル・キャピタルを通じて，地域の新しい知識の創造を支援する」とした。

最後に，BI は内部のソーシャル・キャピタルを通じて，地域の新しい知識を入居企業に流

れ，入居企業が競争相手より先に知識を獲得できるようにさせる。そのため，BI はより多くの競争力を持っているベンチャー企業を育成し，産業クラスターの形成・発展に寄与する。以上のことから，仮説 5 を「BI は内部のソーシャル・キャピタルを通じてより多くのベンチャー企業を育成し，産業クラスターの形成・発展に寄与する」とした。

図 8　本稿の仮説モデル



出所：筆者作成

＜注＞

1) NBIA は America National Business Incubation Association の略称である。全米ビジネスインキュベーション協会のことを指す。
2) Hanifan（1916），p.130.
3) 前掲書，p.131.
4) Jacobs（1961），山形訳（2004），109-133 頁。
5) Loury（1977），pp.175-176.
6) Bourdieu（1986），p.16.
7) 前掲書，p.21.
8) 前掲書，pp.21-22.
9) Coleman（1990），久慈監訳（2004），475 頁。
10) 前掲書，474-475 頁。
11) 前掲書，479 頁。
12) 前掲書，480-490 頁。
13) 前掲書，493 頁。
14) 金光（2009），240 頁。
15) Putnam（1993），河田訳（2001），100 頁，226 頁。
16) 前掲書，207 頁。
17) 前掲書，210-211 頁。
18) Putnam（2000），柴内訳（2006），14 頁。

19) 前掲書，19 頁。
20) 前掲書，19-20 頁。
21) Burt（1992），安田（2006），10-11 頁。
22) プライヤーとは，アクターと同じ意味であり，社会で動いている組織と人のことである。
23) 前掲書，25-27 頁。
24) Lin（1999），p.31-32.
25) 稲葉（2014），5-6 頁。
26) 西口・辻田（2017a），4 頁。
27) 西口・辻田（2017b），80-90 頁。
28) Adler and Kwon（2002），pp.21-22.
29) 前掲書，pp.23-24.
30) 金光（2009），242 頁。
31) 本稿は，知的資本と知識を同じような意味で取り扱う。
32) 図 5 と図 6 における実線と点線は同じ意味を表している。
33) Marshall（1890），p.255
34) Porter（1998），竹内訳（1999），67 頁。
35) 同上
36) 前掲書，78-79 頁。
37) 金井（2003），48-51 頁。
38) Porter（1998），p.242.
39) 西山（2003），87-92 頁。
40) 西山（2004a），87-88 頁。
41) 前掲書，89 頁。
42) 前掲書，93 頁。

＜参考文献＞

Adler, P.S. and Kwon, S.W. (2002) Social Capital: Prospects for a New Concept, *The Academy of Management Review*, Vol.27, No.1, pp.17-40.

Allen, D, Bazan, E. (1990) Value-added Contribution of Pennsylvania's Business Incubators to Tenant Firms and Local Economies, Report Prepared for Pennsylvania Department of Commerce, Pennsylvania State University, University Park, PA.

Allen, D.N., Rahman, S. (1985) Small Business Incubators: A Positive Environment for Entrepreneurship, *Journal of Small Business Management*, Vol.23, No.3, pp.12-22.

Bøllingtoft., A, Ulhøi. J.P. (2005) The Networked Business Incubator — Leveraging Entrepreneurial Agency?, *Journal of Business Venturing*, Vol.20, Issue 2, pp.265-290.

Bourdieu, P. (1986) The Forms of Capital, in Richardson, J. (1986) *Handbook of Theory and Research for the Sociology of Education*, Westport, CT: Greenwood, pp.241-258.

Burt, R.S. (1992) *Structural Holes: The Social Structure of Competition*, Cambridge, Mass. : Harvard University Press.（安田雪訳（2006）『競争の社会的構造―構造的空隙の理論』新曜社）

Bruneel, J, Ratinho. T, Clarysse. B, Groen, A. (2012) The Evolution of Business Incubators: Comparing Demand and Supply of Business Incubation Services Across Different Incubator Generations, *Technovation*, No.31, pp.110-121.

Coleman, J.S. (1990) *Foundations of Social Theory*, Cambridge, Mass: Belknap Press of Harvard University Press.（久慈利武訳（2006）『社会理論の基礎下』青木書店）

Granovetter, M.S (1973) The Strength of Weak Ties, *American Journal of Sociology*, Vol.78, No.6, pp.1360-1380.

Hackett, S.M, Dilts, D.M. (2004) A Systematic Review of Business Incubation Research, *The Journal of Technology Transfer*, Volume 29, Issue 1, pp.55-82.

Hanifan, L.J. (1916) The Rural School Community Center, *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol.67, Issue1, pp.130-138.

Inkpen, A.C., Tsang, E.W.K. (2005) Social Capital, Networks, and Knowledge Transfer, *The Academy of Management Review*, Vol.30, No.1, pp.146-165.

Jacobs, J. (1961) *The Death and Life of Great American Cities*, The Random House Publishing Group.（山形浩生訳（2004）『アメリカ大都市の死と生』鹿島出版会）

Lin, N. (1999) Building A Theory of Social Capital, *Connections*, Vol.22, No.1, pp.28-51.

Loury, G.C. (1977) A Dynamic Theory of Racial Income Differences, in Wallace, P.A and La Mond, M.A. (ed.) *Women, Minorities, and Employment Discrimination*, Lexington, MA: Heath, pp.153-186.

Marshall, A., (1890) *Principles of Economics*, London: Macmillan.

McAdam. M, Marlow. S (2008) A Preliminary Investigation into Networking Activities Within the University Incubator, *International Journal of Entrepreneurial Behavior & Research*, Vol.14, Issue 4, pp.219-241.

Molina-Morales, F.X. and Martinez-Fernandez, M.T. (2010) Social Networks: Effects of Social Capital on Firm Innovation, *Journal of Small Business Management*, Volume 48, Issue 2, pp.258-279.

Myint, Y.M., Vyakarnam. S, New, M.J. (2005) The Effect of Social Capital in New Venture Creation: the Cambridge High-Technology Cluster, *Strategic Change*, Volume 14, Issue 3, pp.165-177.

Nahapiet, J., Ghoshal, S. (1998) Social Capital, Intellectual Capital, and the Organizational Advantage, *The Academy of Management Review*, Vol.23, No.2, pp.242-266.

Porter, M.E. (1998) *On Competition*, Boston: Harvard Business School Press.（竹内弘高（1999）『競争戦略論Ⅱ』ダイヤモンド社）

Putnam, R.D. (1993) *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton, N.J. : Princeton University Press.（河田潤一訳（2001）『哲学する民主主義：伝統と改革の市民的構造』NTT 出版）

Putnam, R.D. (2000) *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, New York: Simon & Schuster.（柴内康文訳（2006）『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房）

Sá. C, Lee. H (2012) Science, Business, and Innovation: Understanding Networks in Technology-based Incubators, *R&D Management*, Vol.42, Issue 3, pp.243-253.

Zehner, W.B., Trzmielak, D., Gwarda-Gruszczyńska, E., Zehner, J.A. (2014) Business Incubation in the USA in Trzmielak, D.M., Gibson, D. (Eds.) (2014) *International Cases on Innovation, Knowledge and Technology Transfer*, University of Lodz, Poland.

稲垣京輔・高橋勅徳（2011）「産業クラスター形成における地理的近接に基づく関係構築プロセスー大阪扇町界隈におけるインキュベーション・マネージャーとクリエイターの関係性の変化」『組織科学』Vol.44，No.3，21-36 頁。

稲葉陽二・大守隆・金光淳・近藤克則・辻中豊・露口健司・山内直人・吉野諒三（2014）『ソーシャル・キャピタル「きずな」の科学とは何か』ミネルヴァ書房。

金井一頼（2003）「クラスター理論の検討と再構成ー経営学の視点から」石倉洋子・藤田昌久・前田昇・金井一頼・山崎朗『日本の産業クラスター戦略ー地域における競争優位の確立』有斐閣

金光淳（2009）『社会ネットワーク分析の基礎ー社会的関係資本論にむけて』勁草書房

金光淳（2011）「経営・ネットワーク理論」稲葉陽二・大守隆・近藤克則・宮田加久子・矢野聡・吉野諒三編『ソーシャル・キャピタルのフロンティアーその到達点と可能性ー』ミネルヴァ書房

丹生晃隆（2007）『地域におけるビジネスインキュベータの課題：「都市」と「地方」における成果決定要

因と支援形態の比較から』『経済科学論集』，No.33，135-165 頁。
丹生晃隆（2016）『ビジネスインキュベーション施設の成果決定要因に関する探索的研究：支援成果と満足度との関係性から考察する「都市」と「地方」の差異』『日本政策金融公庫論集』，No.31，71-103 頁。
西口敏宏・辻田素子（2017a）「コミュニティー・キャピタル序説：刷り込み，同一尺度の信頼，準紐帯の機能」『組織科学』第 50 巻，第 3 号，4-15 頁。
西口敏宏・辻田素子（2017b）『コミュニティー・キャピタル論－近江商人，温州企業，トヨタ，長期繁栄の秘密』光文社
西山英作（2003）「産業クラスターの形成・発展並びに地域戦略の先行研究に関する一考察」研究年報『経済学（東北大学）』，Vol.65，No.2，85-101 頁。
西山英作（2004）「ハイテク型の産業クラスターの形成・発展に向けたインフルエンサーの役割」研究年報『経済学（東北大学）』，Vol.65，No.3，83-95 頁。
星野敏（2006）『最新ビジネス・インキュベーション－世界に広がった地域振興の智恵－』同友館
NBIA ホームページ https://inbia.org/（2017 年 11 月 28 日閲覧）
経済産業省ウェブサイト http://www.meti.go.jp/policy/local_economy/bi/index.html（2017 年 11 月 28 日閲覧）
中国産業調研ウェブサイト［2016］「新型企業孵化器発展報告（2015）」https://wenku.baidu.com/view/7369f857f61fb7360a4c6554.html?re=view（2017 年 8 月 22 日閲覧）

Social Capital of Business Incubator and Knowledge Creation in Industrial Cluster

Ying Liu *

Abstract

The aim of this paper is to set up a hypothesis model about how the vital catalytic role of social capital of business incubator in promoting the formation and development of industrial cluster. The social capital studied in this paper is divided into two parts. One is the social capital that built between business incubators and external organizations in the region, the other is the social capital that built between incubation managers and tenants.

Business Incubator is a facility that provides shared office, business support service and network to start-up companies. Since 1980s, many countries and regions have recognized that business incubator could contribute to the formation and development of industrial cluster. Accordingly, there are more and more studies about business incubator, but most of them are empirical studies. So theoretical relationship between business incubator and industrial cluster is still unclear. In addition, many previous studies focus on the network construction of business incubator, many of them do not do a detailed review about social capital theory which is important in network theory.

This paper focus on social capital theory and industrial cluster theory, and set up hypotheses about how business incubator promote the formation and development of industrial cluster. The hypotheses are as follows. Hypothesis 1: Business incubator plays a role of second level influencer at industrial cluster. Hypothesis 2: Business incubator support knowledge creation in the region through structural social capital which is built by business incubator and external organizations. Hypothesis 3: Business incubator support knowledge creation in the region through relational social capital which is built by business incubator and external organizations. Hypothesis 4: Business incubator support knowledge creation in the region through cognitive social capital which is built by business incubator and external organizations. Hypothesis 5: BI fosters more star-up companies through internal social capital and contributes to the formation and development of industrial clusters.

Keywords:

Business Incubator, Social Capital Theory, Industrial Cluster Theory, Knowledge Creation

* Graduate School of Business Administration, Doctoral Program in Business Management, Ritsumeikan University.